

新小銃及び新拳銃

柴田 幹雄 陸自75

はじめに

防衛省は陸上自衛隊の新小銃及び新拳銃について、それぞれ3品種を参考品として取得し比較検討してきたが、元年12月6日にその結果が発表された。

新小銃HOWA5・56

小銃は豊和工業のHOWA5・56、ドイツのH&K社のHK416、ベルギーのFNHERSTAL社のSCARLの3種が候補に挙げられ、HOWA5・56が選ばれた。HK416もSCARLも口径は5・56mmである。豊和工業は以前から小銃の意匠登録を公表しており、今回の写真はそれになり近いものである。

HOWA5・56は、諸元などは公表されておらず、公表写真からわかることを多少述べておきたい。全体のシルエットから、銃身長は89式より短いように感じる。有効射程が短くなっている。作動機構は銃身の位置から89小銃と同様のガス利用式と思われる。消

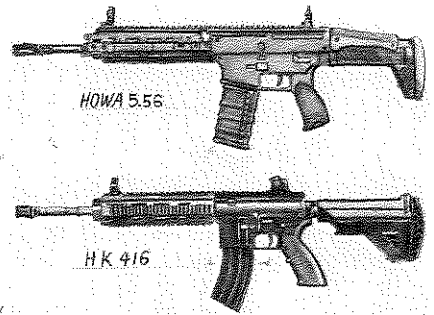
炎制退器の後ろに銃剣止らしきものがある。着剣は可能だろう。

ハンドガード(被筒部)の上下にピカニティーレール(レール)が装着されている。米軍のピカニティー兵器工廠が提案した、米軍のミルスベックに基づき、狙撃眼鏡などのアクセサリを取り付け台座である。これにより眼鏡のほか、フラッシュライイト、前方握把など装着できる。各国の新しい小銃、拳銃にはほぼこのレールが付いている。機能の発展性を持たせている。

銃床は伸縮タイプで体形や防弾チョッキ着用の有無に合わせて調整できる。また頬付けをする部分チークピースも調整できるようだ。レールが付いていることから照準眼鏡やダットサイトを付けることを想定していると思うが、そのためにはチークピースが上下できることは極めて重要である。

安全装置は左右両方に切り替えレバーのついた、いわゆるアンビタイプ(Ambidextrous Type)になっている。64小銃は銃把から右手を離さなくては安全装置を切り替えられないのが大きな問題だと思っていた。89式になってレバー型になったが銃の右側にあり、依然として右手の人差し指では操作しにくかった。イラクへ派遣される段階でようやく左側にもレバーを付けるように改修され射撃が必要になった時点

で安全装置を直ちに解除し迅速に射撃開始が可能になった。また安全、単射、連射の「アタレ」は64小銃以来の伝統か。



照星、照門は可倒式のように、照準眼鏡や暗視眼鏡などをレールに取り付ける際は倒しておくことができる。弾倉はリブがついていることから樹脂製のようで、残弾が横から見えてわかるようにスリット状の窓が開いている。銃の心配もなく軽量化になる。全体にコンパクトでバランスもよさそうで良いデザインであると思う。

対抗馬だったHK416は、H&K(HECKLER AND KOCH)ヘッケラーアンドコック)社製で、同社は戦後西

独での創立だが、妥協をしない製品作りで高い評判を得てきた。有名な短機関銃のMP5などは各国の特殊部隊、警察が使用しており、日本のSAT、皇宮警察、海自の特別警備隊も機関拳銃の名前で装備している。世界最強の機関拳銃と言われるHK7も同社の製品。さてそんな一流メーカーのH&K社のHK416は、米製M16から発展したM4カービンを米軍がH&K社に改修を依頼してできた銃で、機構的にはM16を踏襲している。信頼性と発展性が向上しており、米軍特殊部隊が装備している。

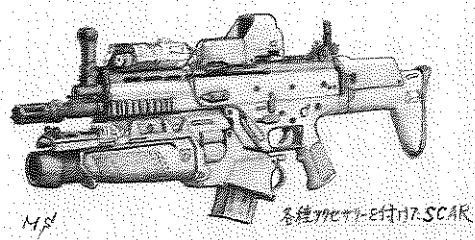
もう一つの対抗馬はSCARL(SPECIAL OPERATIONS FORCES COMBAT ASSAULT RIFLE LIGHT)の名前の通り特殊部隊向けにデザインされた銃である。製造のFNHERSTAL社(ファブリック・ナショナル・ハースタル社 以後FN社)は、ベルギーの銃器メーカーで、7・62mmのFNライフルは世界20カ国ほどの軍で採用された実績を持つ老舗である。SCARLは5・56mm、作動方式はガス圧利用だがM16/HK416と異なり、64小銃と同様のショートストロークピストン式である。レールが被筒部の4面に標準装備されている。挿

絵はSCARLにレーザー照準器、

光学照準器を上部レールに、下部レールにFN社開発の40mm擲弾発射器(EGLM)を付けたものである。

SCARLは、単体で見ると、HOWA 5・56は対抗馬2種の良いところを取り入れた銃のようにも見える。HOWA 5・56も各種アクセサリーを付ければこの挿絵のようになるということだ。陸自の任務も多様化し、小銃も至近距離から400〜500m程度までは有効に射撃できることが望ましく、昼夜間問わず戦うことが求められる。そのためには暗視眼鏡、照準眼鏡、フラッシュライトなども銃に装着することが必要になり、レール装備のHOWA 5・56はようやく欧米の軍用小銃の標準に追いついた。

あえて言うなら、HK416はHK417という7・62mmバージョンがあり、SCARLにもSCARH(H&E A V Y)という7・62mmバージョンがある。できればHOWA 5・56もモジュラー型にして銃身や弾倉などを交換することで7・62mmバージョンたるHOWA 7・62も並行して開発され、600mもしくはそれ以上射距離の射撃もできるタイプが欲しいところだ。かつて64小銃の有効射程を決める際に、無作為に場所を選び人間の目の高さでどれくらい遠くまで見えるかをOR検討し



て定めたと聞いたことがある。市街地や錯雑地では視程は短い、戦闘は視射界良好な緊要地形をめぐって起こるだろうから射程は長い方が良い。米軍もベトナムのジャングル戦では5・56mmが良かったが、アフガニスタンのように視界が開け、風の影響を受けるところでは7・62mmのM14を再評価する向きもある。現在は彼我ともに防弾チョッキを着用することが多いだろうからパシチ力のある7・62mmは魅力のある口径である。特に中隊レベルの狙撃手・指定射手用の銃(マークスマンライフル)としては最適ではないか。ぜひ将来のために検討してほしいものだ。

戦闘車両には同軸機関銃として7・62mmを使用しているから補給面でもそれほど問題にならない。隊員の体格もよくなってきているからこれを機に7・62mm常装薬NATO弾に変えることや、米軍が関心を持ち始めた6mmクラスの弾薬開発も視野に入れてほしい。

いずれにせよ、小銃は軍のシンボルの意味合いもあり、国産のHOWA 5・56が選ばれたことは大変有意義であり、うれしいことである。筆者の世代にとつては64小銃が相棒であり、細かな問題はあったものの総じて良い銃であったと思う。防大の2年生になってM1ガーランドから国産の「新小銃」(64小銃)が持てることは大きな喜びだった。

新小銃は現在の最高レベルのHK416、SCARLと比較して性能的に遜色なく価格的にも28万円余りと他の2種より低価格である。豊和工業は銃器メーカーとして米国でも実績のある会社であり、素晴らしい銃を生産してくれるだろう。新小銃の部隊での評判が聞けるのが楽しみである。

新拳銃

新拳銃はH&K社のSFP9が採用された。検討対象になっていたのは他に、イタリアのベレッタ社のAPX及

びオーストリアのグロック社のグロック17である。

3者に共通しているのは現用の9mm拳銃SIG P220と同じ9mmパラベラム弾を使用すること、撃発がストライカー方式であること、フレームがポリマーという一種のプラスチックでできていることである。

ポリマー製のフレームは、拳銃製造では新規参入のグロック社が1983年にオーストリア軍に採用された拳銃Pi80から始まった。グロック17は、Pi80を米国で民間用に売り出して、ポリマーフレームで軽量化されていること、17発が装弾できること等有名になった。約1〜200gほど軽いことは常時拳銃を携帯する警察官には大きな魅力であったろう。装弾数は自衛隊の9mm拳銃が弾倉に9発、他の軍用自動拳銃も13発程度が多かったの、当時グロックのことを知って17発という数は凄いと印象を持った。ポリマーフレームは軽量である以外に酷寒地でも手の皮膚が凍り付くことがないなどの利点はあるが、金属製の削り出しで作った従来のモデルに比べると何とも安っぽい印象があった。現在多くの自動拳銃がポリマーフレームに替わりつつあることを見るとグロック社に先見の明があったということだ。ストライカー方式とは、スライドを

後ろに引いてばねを圧して下げたストライカー（撃針）を、引き金を引いて解放し、ばねの力で前進させ弾薬の雷管を打つことで発射する方式である。

自動拳銃の元祖ともいべきコルト M1911ガバメントや、現用の9mm拳銃はか多くの自動拳銃はハンマー方式である。スライドを引くことでハンマーを起こし、引き金を引いてハンマーが撃針を打撃して弾丸を発射する。

ストライカー方式は、グロック以来有名になったから新しい方式かというところでもなく、日本陸軍の南部14年式拳銃はストライカー方式である。ストライカー方式はハンマーを動作させる機構が不要で、部品点数が少なく、ハンマーの作動で銃がぶれる影響もなく、銃身を引き金に近く（低く）配置でき反動を受け止めやすくなるなど、命中率向上が期待できる。欠点としてはダブルアクション機構を持たないモデルが多いこと、外観から撃針が下がっているかどうかわからないこと等である。

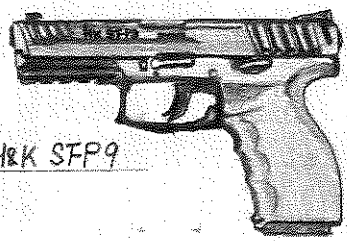
ベレッタ社はイタリアの名門銃器メーカーで、米軍の現用正式拳銃はベレッタM9であることから名門ぶりが推測できる。APXは、ベレッタ社最初のポリマーフレーム、ストライカー方式の拳銃である。スライドリ

リースもマガジンリリースともに銃の両側にあるアンビタイプである。後発モデルだからか、グロックやH&Kの拳銃になんとなく似ている。

採用されたH&KのSFP9は、*Herz Fired Pistol* 9mmから来ている。米国では、VP9の商品名で出されている。VP9は*Vollspatze* 9で、フォルクスワーゲン（国民車）のフォルクスで、いわば国民拳銃という名前。なんとまずい名前だ。

マガジンリリースは引き金の後方にある、アンビタイプで瞬時に操作でき、現用の9mm拳銃の大きな欠点は、グリップを右手で握って下部の弾倉止めを左手で操作して空弾倉を取り出さねばならず、弾倉交換に時間がかかることだった。現職のころ、指揮官配置の時は毎日登庁したまま拳銃の射撃予習をした。その際弾倉交換の練習もしたがどうしてもなじめなかった。SFP9ならコルトガバメント同様、マガジンリリースを押し空弾倉を落とす、その間に左手で次の弾倉を準備し直ちに装填できる。

装弾数は20発と思われる。現用9mm拳銃の弾倉は弾を1列（シングルコラム）に入れるから9発しか入らない。これを2列（ダブルコラム）に弾倉へ入れて20発装弾できるとなるとずいぶん装弾数が増える。その代わりグリップ



H&K SFP9

M.S.

プは太くなり小さな手の隊員には撃ちにくいかもしれない。ただネットでの実射経験者の記事ではグロックやベレッタと撃ち比べて命中率がよく、持ちやすく、気持ち悪いくらいよく当たる、という感想もあった。そのあたりは防衛省の検証でクリアされているわけだし心配することもないだろう。

重量は710gで、コルトガバメントの1130gに比べるとかなり軽量化されてポリマーフレームの利点である。フレーム先端下部にピカニティールールがあり、レーザー照準器やフラッシュライトを装着することができる。弾薬は先に述べたように9mmパラベラム弾で現在の自動拳銃は多くがこの弾薬を使用している。コルトガバメン

トの45ACP弾（11・4mm）に比べ貫徹力も優れ低反動で、細身だから装弾数も多くできる。しかし防弾チョッキを貫徹できず、歩兵に致命傷を与えられない。だいたい昔だが米軍で将校の拳銃を機関拳銃または短機関銃にしたらどうかという研究があったが、誇り高き将校がギャングの使うような銃は持ちたくない、結局拳銃に落ち着いた。拳銃は実戦で役に立つより、日本軍将校の軍刀のような象徴の意味が強いのもかもしれない。

もし将校の象徴でなく、防弾チョッキを貫徹する実戦的な個人防護火器が望ましいのであれば、H&KのMP7のような4・6mmの高初速弾を使った機関拳銃を装備するという選択肢もある。有効射程も200m程度はあり、幹部の自己防衛用のみならず後方職種標準装備火器にいいだろう。次はぜひ9mm機関拳銃の後継装備も検討してほしい。

おわりに 一国の防衛の象徴は兵士が持つ小銃である。国防の気概も「いざとなったら銃を手にして立ち上がる」という言葉で表される。さすが一家に一台国民拳銃ということはないにせよ、多くの読者に自衛隊の小銃・拳銃にも関心を持つてもらえればと思う。